

道郷道中縁栗毛 初編

13

3230

10

1

2

3

4

5

6

7

8

9

20

1

2

3

4

5

6

7

8



昭和十年
七月四日
購求

近郷道中膝栗毛 初編

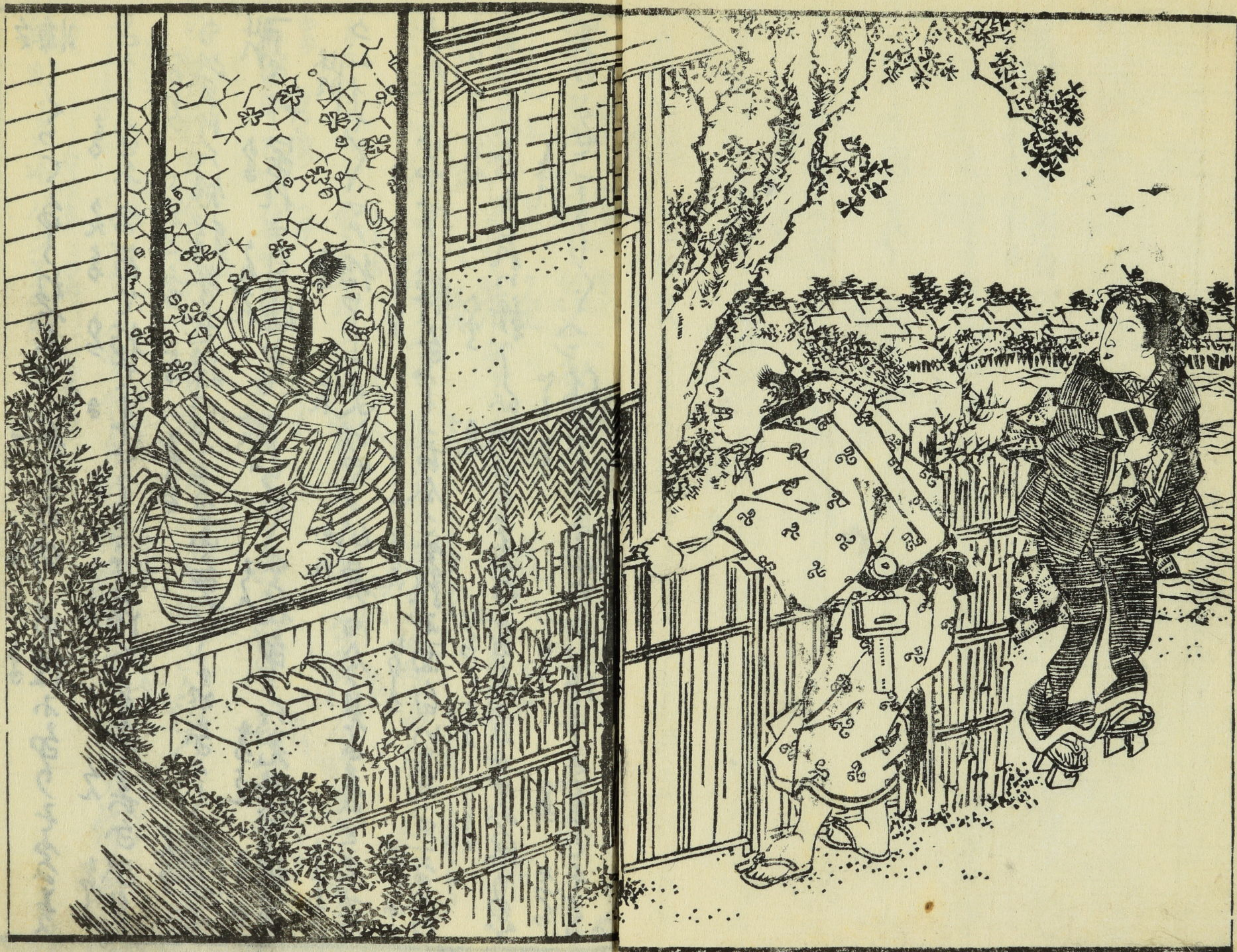
東都

教訓亭春水著

○ 發端

古語に曰人の生涯は似旅と云哉門松の一里塚あれは歳越
の同屋場あり月日の飛御川笛ふをねは隙ゆく馬士
立揚ふ休む年々の関ふ形けねは驛路の鈴れゆり
ゆゑも後へ戻らぬ老の坂長に旅終ふ種々の暮れあれ
ハ悲しとあり道中迷ひの雲助が絲る酒代の癖あれば

ね き 北八がわらぬ藤相と藤次が不案トの仕換ると相
 互に争ふ門は福徳の事三月に藤坊を由云で活世
 さい き 藤次さんくモウ 配ねろ馬藤々々い己刻とぶアト處
 の戸をうちたけバ家内中藤次を去清が受て「ヲ」
 山八の例あぐり藤の利を男とせトいふぐり藤惣親
 して藤の藤を引ぬる「ナセ例あぐり藤の利を男と
 せん」といふと今時かすて藤とて藤とて仕をよる





○春水伏て申と巻中まで論をのりて教訓の一助と
 されば作意の百種々ありとあり〜あるなり

北八が夢の奇談 花水ヲ羅志樓 北八筆記

相模園鎌倉那小見城が秘といふ所あり木立間くは表
 下々人跡絶つる木下園わら〜淋〜き山蔭よ身と遁れつる
 化隠居世不立時より入道〜人を見城のさる腰も今や年
 光素も柔弱たぬく市中〜冥物ふ出ても途中で商人の夢
 不夢くは今日砂糖入金時と咽名ふ忍れ辻出とと昔に

あぐろ流り不遷れてるふ角縁をり美ふおぢけが情とむ
くと思ふ見紙入道場ようく久し枯柴と木の葉を焚
て山菜と煮くあひびと煮あぐろ獨云「アハ」肝厚と腹り
用のあいのも困るゝ道理で人間が隠居者でも種くと不入
世話をやくとあぐろ足腰が違者でもあぐろ隠居あひをを
きるものであつて。アあぐろ昔と違つて今ぢやア箱根のう
け方地小仲間此も不居する居る所がけ方より人智
のうが化るのうよりで花頭垂ハ写し繪の細工人が工風を
あて首の髪髪見の白あぐろ目存るうう電教がみそお
とととと評判のあるあけ方が狭の種をたふ実て夜美徳の大
編入であぐろ目あぐろ古風でたぐろいと種も怖るもせす
草双成中では文化物流りあぐろ何種も新種新し
お化ち泉目吉の細工が奇妙小出あるうう古い
お化の縁着物もあるはモウく流りおぢれと一向つうさき
のう播ぢやくが二三十年評で縁りの縁衣で蛇の目金で
出るけ中へ踊りてませうう金と振小酒あて居る河津のお化

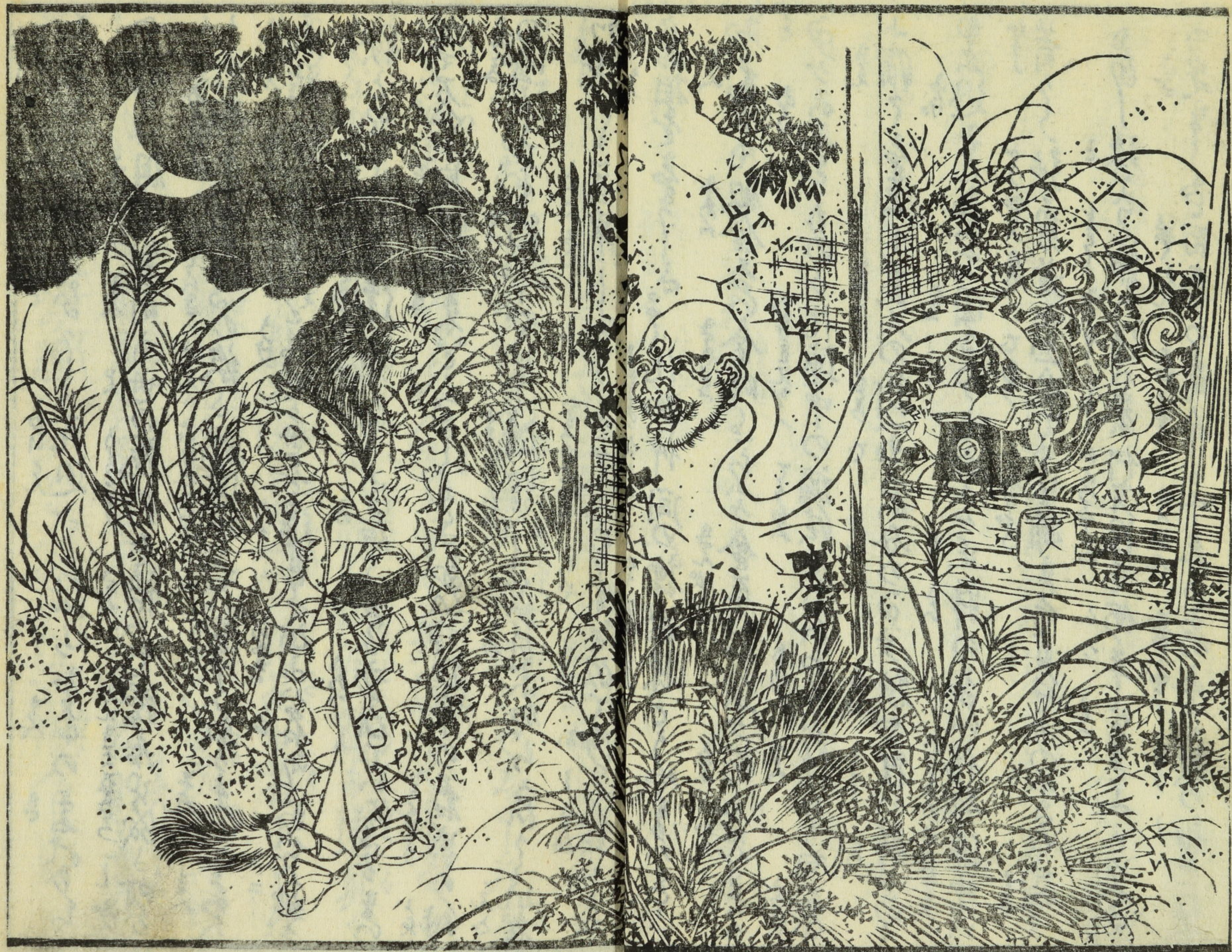
今の子供も大人の指し奉明ごうおれ江戸ぐうおの誓う何
 とも思ふも怪状はき物終りうう一縷の血を補ふまふ人
 面をうやうやと揺る才智のあふ化物仲万のさざれこざれ
 一もあうね揺る足と思へ丹州のお跡がけ身ふ化て四
 天王ふゆい目の出合る相馬内裏の古所所(件)間がや
 れては時分のうが清くやうさうあぐうも化通くと居ら
 してさうけ揺る光込ぢやア詮方かわるこ月入道や二眼小僧
 何揺るさう知らんトさまが首と思ひ出て我付情おうは某
 の戸ををくとたぐ青「これの緒團を武者修行の坂田の
 金平とやら者野宿の兼て是悟あぐうおろけけ中と
 け家の近き心一夜の宿をお借や一度ト云ふと怖て入道
 へ返りゆせば奥く物思ふやうそもく金平といふ奴も
 金時のふざと申う云がゆふゆえに強勢のふざ何でも怖い
 のと大おまの名ふ仮用ひて金平粘金平牛馬房と世ふに
 ううさ荒者ごうう出會していあぶるいことと思案をうう

[illegible]

金平はさういふに、
 コレサお頭スー経で、
 とまじりかぐろ
 お経すゝいあり
 その武者修行の
 か案トあるひで
 さうと知るほど
 あるものごと云
 を熊相をまき
 おもふも似合
 とあつちやと
 のがあらまど
 ふ漬たまふて
 む名逃そとあ
 昔う強勇若者
 もあし珠より
 の定まりむ百

入道へ参何々位
 金平といふころ
 一ヤヤとれ
 化物仲間
 金時ごろ
 化連中の調
 其人の所
 正解の
 生捕も
 何年か
 千年の

入道の眼
 金平といふころ
 老色と糸の弱く
 一ヤヤとれ
 化物仲間
 金平たう
 何もおそろ
 強けりや
 狐や狸ハ
 何れんぢう
 化物連中
 見せぬの
 こと
 数



お身の上であらう 花邊ごとくあらあまのまれのち
やうござ但しお前も世の流れを悟つて隠居せ成し時分
うう赤本やも時の流し化連中ではござうぬうまふおま
あきん えん ふうき せん ちやんちやう
自然と天のつとを悟てう世を退きこひひ名やあふん紙
あきん まがえんま
萩とよく先遠慮あし小居する幸ひでいであるまの
ろろろ其様ふまどろろろろろあふでびろの若盛の時
の紙でも紙一やせう紙に久くお目ふからあふういふ
ひびひ一之早くろろ山平山の案を以て隠居を謀りふ
まろ ちやんま そろ みやけ ぶんおあせう ん
事りート茶釜と活ての云産りの文福和尚と名ふおれ
ひとま ちや みる みる みる みる みる みる
聖僧とあそひ思われける見紙入道ハ久くぞあふれお
達ふはまろる紙したとん方おやう奥通してりてあふ
ろろ ちやんまおまろ ちやん ちやん ちやん ちやん ちやん
むろりの山住持た有とておれの調法ハ勝る道具も
あふろ ちやん ちやん ちやん ちやん ちやん ちやん
自らの働く自由自主とて若焚焼の新病も若ふろね
すぎろろ せんせの ちやんちやん ちやん ちやん ちやん
と過紙方の金盛ふ化物や一のちやんと思ひやてを
ちやん ちやんちやん ちやん ちやん ちやん ちやん
ち顔も化物もあふまろとてあふねとちやんちやんあふ則ち世の
ちやん ちやん ちやん ちやん ちやん ちやん
情あふるる狸の例の腰つとてあふて笑ひと憎うける

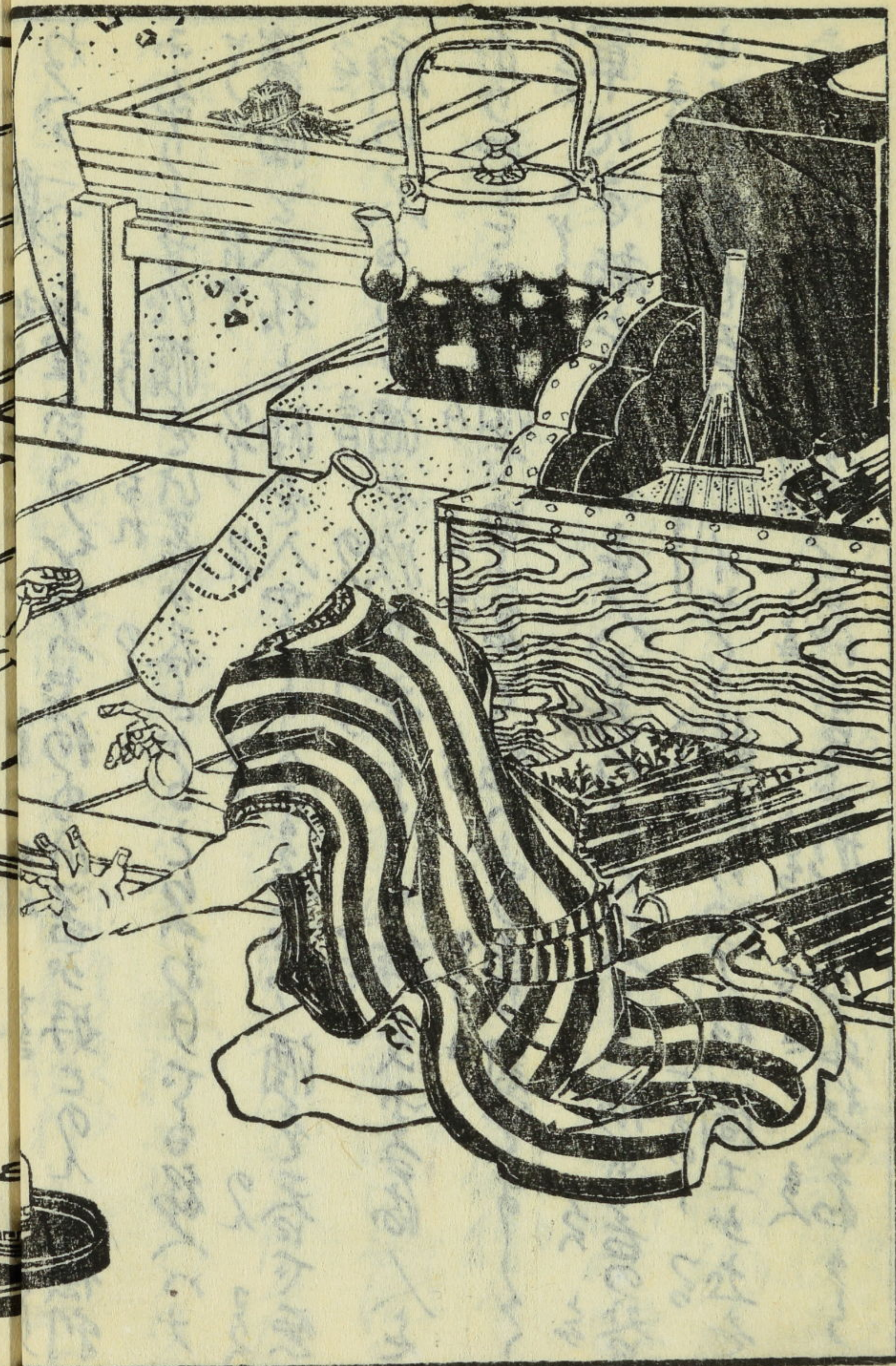
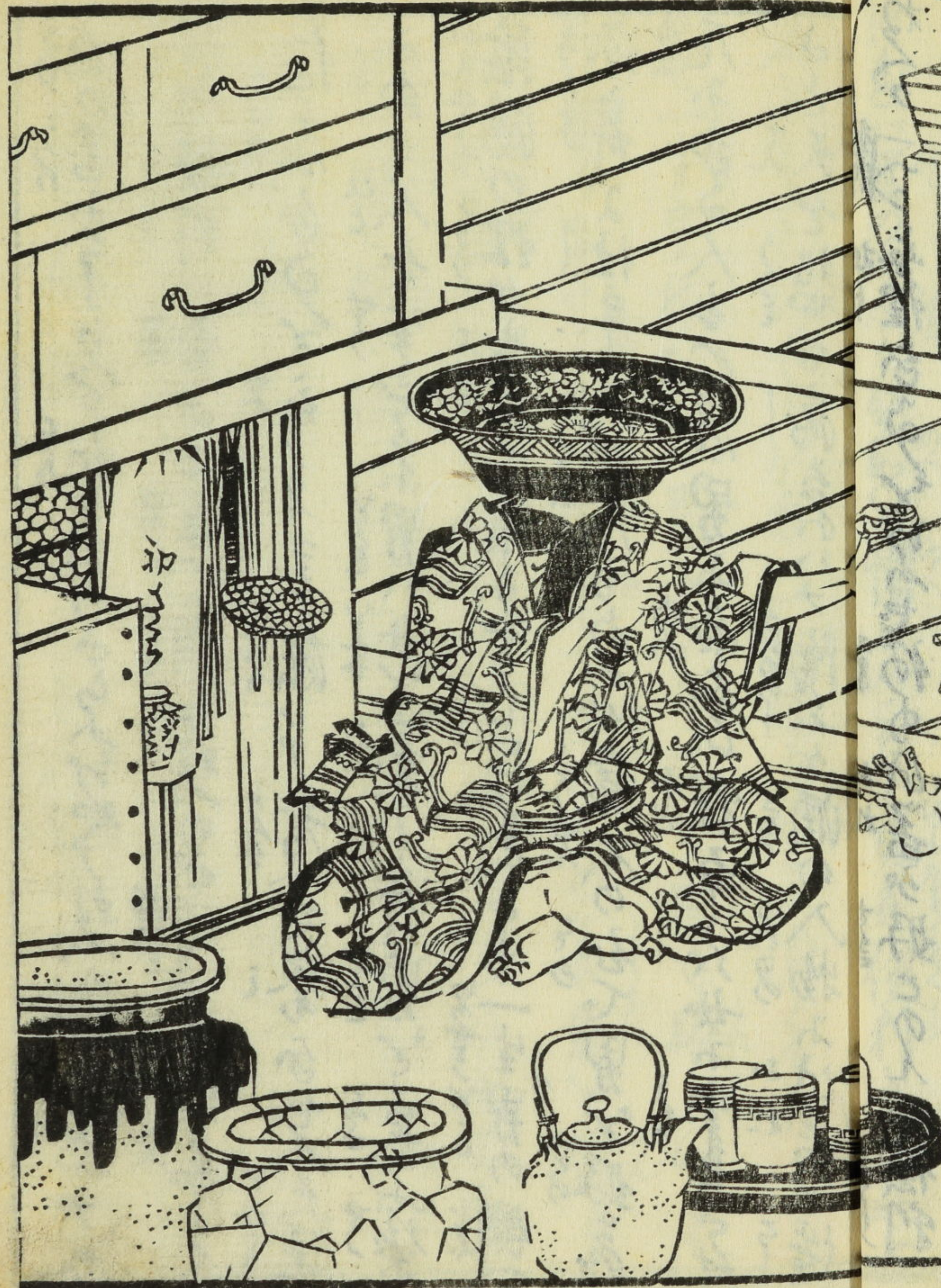
此はききと知らんと思ふ予が再麻の愛我
結ぶを結束日等を採をいふ人

イヤスと云ふ者振ど。ハハこれいふまである人
の中うん付出と増補あるのびる人何れも
りくるいせ。ナクけ身がくさる愛に違ひあけれども
筆の採振ど面白のう作り振ま案られるのイヤ
足る人云と云うあぐら此八市ての松葉菜と云ふ不
給る賞振どノウ。ドレく。お前の前文い又振ひつくりいせ

登地面紙 弥次郎 演夢

松亭閑意十二月不構世間慰我勞果子金唯
蓬嶋冬春積橘夏秋桃と連ねハ山山元隣が秀
句へ丈本の実と果と草の實と蔬ととり日本中
五穀小製衣を加砂糖の甘味を添ふる物を初る菓
と云呼あハせり足と盛器と菓子ととととあづけ
るえ東器の上品とて多ハ高貴の席ふのと連ねり
秋時菜草葉ふ入残されて傍る道具の中にもどり

一が傍ふ貧乏之徳利ありて坐び居る某ふ公金の迷惑
下戸の癖ある酒の白ふむせびて後たしく徳利は
向つて曰コウく此些をくくをされて呉移る酒の白
ひで堪へられ移然云くくば某ふ障るごらふが徳利やと
否ふのふふにせ破戒の対ふふ不及物の間遠ひを法の
つと喧嘩に論ととりめ入るの用と忘れてはまたぐひ
ハ悉皆酒の咎にせ同ト器ふあるる徳利ふたうね
けはば宜のふ人がお前を憎めばこそ貧乏徳利と云ぢやア
わんう一ツを理あるゆとりよせ何もけ器が好このんで徳利
ふありゆせに酒をけ器が吞とぐるとりわけでも移ハナ
醬油と入括と油を入ちと人まうせどア酒を天にで要
癖のふあり酒を飲を常よりも律義ある人とな
ありやと殊ふ酒で客を某と遣いごり勇氣とすく
軍にも柄をある人となり何もの器の咎
由酒の罪もあるハイヤく然括ぢやアね陶工が志を
あつめてお前を造つて神ふまご形も出来ねるわく



酒の器さきふくさきるむがあらうさきぢやアねうその時ときナセ
酒の徳とく利りハ香かどと云て断ことらねのどどイヤやあねを
偏へん屈くつふふと云いノウうコウこう様やうア考こうて案あんあせ人ひと又また道みち
さあが人ひとを生せいまじる男おとこハ女をんなと愛あいハ女をんな男おとこと慕もふ
陰陽いんやうの理りが出来できて居ゐるやうやうどけきとも一生男いっせいおとこの側そば
不寄ふきははまの比ひ丘か尾おもあるが當人あたりにんのむで男おとこと好このま
尼あまある人ひとも何故男なんにやふ合あひ程ほどるらば女をんなふ生せいまじさ
こと天てんを怨うらむも為なるゐハナ陶工たうこうが酒さけの入物いれものふけ蓋ふたと造つく

ううここううとといいつつてももけ方かたハ一生酒いっせいさけを入いれれるとも根ねを



世よに一生空徳利いっせいくうとくを置おきこううとて樂らくで嬉うれしいも
思おもふとサさままと上戸じやうこが正氣せいぎで酒さけの上うへの善悪ぜんあくを論ろんト
たり能毒のうどくを毎まいて云いふ道理だうりふかああふふもああふ
が酒さけの味あじと酒さけの徳とくを知しるね下戸げこが酒さけ香かのを被か毛け
いハ理りも非ひもワわくくげげふ自分おのれが嫌きらいで穢けるのどう何え
ふもああふふ酒さけも執度しやくどがああふふおおののるるどどその旨あまい
のちも一い分ぶんハ幾いく程ほどもああふふとといいけ器きを振ふてて突ぶ

之徳利といふものもこれにむのつけねで候しむるものも
いんぐろえ いんぐろえり おんは ちやうとやう かなざり
貪る人ち貪る徳利の分限を守りて一鉢二鉢の大酒
の肴ふすしう身の業で六ありやとまへう酒の旨いと嫌
ふ我すく下戸の勝どが酒呑いさうちうの肴ふ砂
糖をやうくて其のめを織らうと上戸をむぐ廣い
でいるう子ト徳利の口のまきうふ云つめられて葉ふ金糸
塗のまきまきふありしが備う道具の中よりめえおど
徳利ふ向ひ暫時と夢とけ亦同音ふ及んとさうき物
しもわハグふび起せし夢音中も眠りの夢ハ夢ふけり
「ヤヤ」惜いものとあさノウこれけ身が見え化物の夢
よりハ股経かりうのふ悔しめとあさエウけこの光を
そで貰いしとノウ「ア」〜夢が自中ふあるものゝ「イヤ
け」夢はよりハ後が夢度「イヤ」〜夢よりハ化物の夢の方
か面白いのナ〜と録倉と夢と名所古跡が思ひ出され
て亦道中が仕度あると振ど「ホン」ニス〜く何れへも出け

あいふうは三張宿の版も喰ふを指で「まゝ知とけりしお
 ちととてや ちととてや ちととてや ちととてや
 出て足掻うノウ「されバサ隠居の身分ごううをさと思は
 るが流石ふわれよけ方等が十に年も以前の事でも出ろ
 けてハ覚束るのやうぞ「それハ遠いのるのやうぞ殊小園との
 うめり うめり うめり うめり うめり
 名家で十返舎一九をむおきふして居さううを家
 るやトろべ ろべ ろべ ろべ ろべ
 けい次郎を清由山ハも長縁が出来さ今の不審内を
 さうや さうや さうや さうや さうや
 春水の白紙と貫して田舎（初てハ何程ごううう「ナニク
 それハ世ふあさう人 あさう あさう あさう あさう あさう
 け方由をさあで出うけはハナ



其の上におもひのけしきも改めより狂おも地にも上達志
しき 昔より糸が太まどアナ 一イやくそれぞ悪いら
第び何程で徳業毛の道連ふ博識や理屈の益ふ立
経へ何でも俗物が好むる一袋指サそれの義知いふ
今度い実早本実省で佛壇三階く居る石の
地蔵の所(遠く)で膳棚の崩るのを押して客の目
とまる指さるもがりの可笑うハ出来るせ一それハ知れ
こりサ娘ををゑるの縁でも昔のつりて出うけて通

られるもの今でハ何所の田舎も情織が沢山あつて
けちら けちら けちら けちら けちら けちら けちら けちら
でなくおもしろい 神楽の宗匠が名所さうにわづらひ
で風俗を習て出指がアアアア 一イやく 一イやく 一イやく
何れまでも 神楽の宗匠が名所さうにわづらひ
でいあつて 一イやく 一イやく 一イやく 一イやく 一イやく
けちら けちら けちら けちら けちら けちら けちら けちら
北八が今度の近頃 近頃 近頃 近頃 近頃 近頃 近頃 近頃

神かみ社や佛ぶつ園ぐわんの中なかつ来きと尋たづ歩ふりくとり風ふう流りゅうで俗ぞく相あひく
るくそ好このむるのう一いちイイや風ふう雅やより俗ぞく人ひとの方かたが室むろ後ご
目めを仕しるる振ふで一いちアアとと業ぎふ平へい由ゆ版はん吟ぎんくくううななららどど
と云いふふののちちうう何なんふふとと道みち中ちゆうハハままくくるるせせトトいいくく
儀ぎ立たののそそううだだんんををままりりししるる

近郷道中膝栗毛 初編

近郷道中膝栗毛

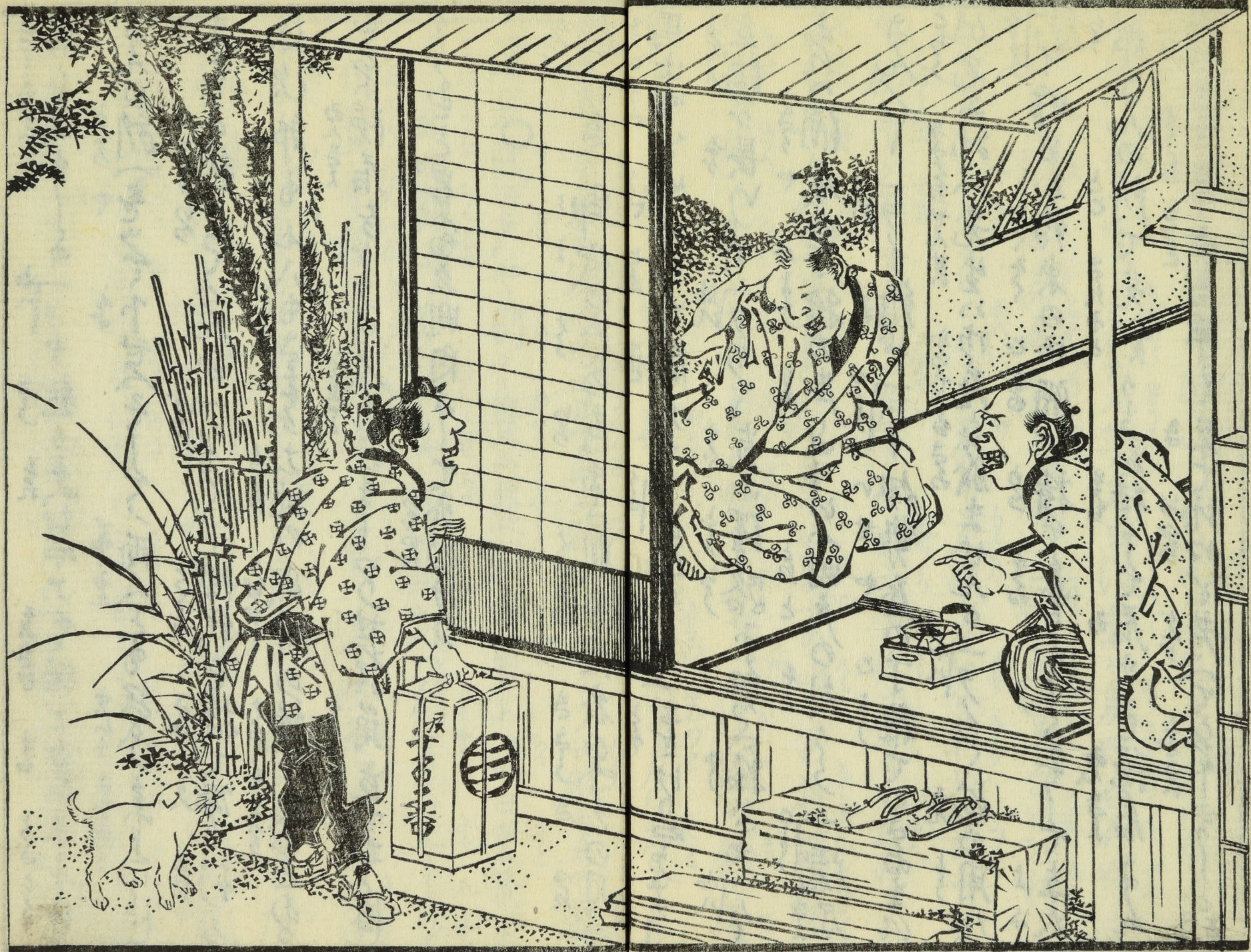
東都 教訓亭春水著

初はつ午ごや伊い勢せががんんととハハ天てん素そトトハ貞しん佐さが秀しう向かうなり
けし頃ころハ如ごと月げつの初はつ旬じゆん彼かは次し郎らうを清きよ北きたハハ相あひひ習しゆひ
睦むつしし呼この中なかつに過すま越こ方かた思おもひひぬぬれれが儀ぎ衣いををままつつ訓しゆみ
妻つまもああけけままいいつつも身み輕かろの樂たの湯ゆ后ご下しもキキ北きたハハ久くととをを
何なん所ところをを出でううけけずずかかノ下しも出でううけけずずくくあありりモモウウをを圖ず

ちやうどとまゝなまゝあり
肉へ並ぶ所一社も這入仕ね
一所何ぞ面白くもねえ
る酒を沽ぐ所を通るもの
「イヤあやれ」と云はけ
方へ編み
さめ地口を覆れて忘れて
居てが催促必来るぞら
ふ一ナシノ
催促が怖いもの借金ぢや
アあるかー地口の二百
や三百コウ古車廢々川流
の下詰ぢやアあるかー
二そのことごとく
のとそを撥ふる輕く云ふ
故ナ地にござうと云つて
も禁句さ
合のあい振ふ人の糸に障
らるゐ振ゆと考ふるのハ餘程むづ
かしい
「いせをせあふ」
「る世も金も入ぬもの
う只可笑さんあまこび

宣のさうさ 一サア可笑うが物来るいナ一でまじさうよーふ
 さらうが 事業ぢやア 夢も移るさう 一とんる愛敬
 のあひういさわらんご 是も神いさあのおふのうさ 残
 ま づえ かの 氏子整昌の爲ふ地は方燈と上る
 金の費がするでふあ 氏子整昌の爲ふ地は方燈と上る
 のんぢぢやア 移る 一ア 腹と立てさうもわく神奈の
 りんも ぢぢぢ 地はがむづういと迷惑をふふさう 物来るさう止
 いんが 地はがむづういと迷惑をふふさう 物来るさう止
 おと云のヨ 一さうさ 思ふてやう ト十二名所ハ
 何れしうけノ 一今 布施の毎天さあまて 美一ハ 幡

の八幡八幡の森（八幡）面白（面白）く西の方へマアお入りなさい
あゝ「あやと先西九州さうな浮東の奥州白石山」
「まこと小国」さああ「あやと」その癖は満足なほど利と
少くも出来た「おあやも」主派なほど利の何れ
も幼平が過さうな度と仕やせう「あやと」
一日も早く旅へ出て見たくある馬士の唄の長持人
の唄と聞くと何となく素が睡て宜せ「弾路の鈴の音
のいさゝか」何れも妙さうと所へは本戸の外へく
馬士唄と唄ふ夢が聞える「あひさ」さうさきけりやアナリ
立場が長いイリ「アヤ」直に彈路ふある振とせ「ハ
あれ酒屋の丁稚の声どトお戸の外へ」隠居
さん「アヤ」雅で「ハヤ」伊勢屋の丁稚でござるあま
い宅北八先生ハ市座を成ません「アヤ」何の用だ
「アヤ」昨日お約束の酒と持て来りまうさうと太
郎さんの所で先刻ううお待せ居ますと隠居さん
達ハ何卒少く早く来て地味と考へてお入りなさい



頼成たのなるまゝま「カヤ然さりまぢやアアを酒さけと申まをふと申まをす
さんさんの所ところ（も）ぞ下くだせそそと兩人ふたりとも只ただ今いま来きた上うへに
ままとと然さゝててええか「ハイはいくトと徳利とくりを提ひて歸かへりりぢ
弥次郎やじらうももハハももささとと土地とちの氏神うぢがみの初はつ年ね祭まつりととわ
るる不ふ隠居いんきよををぐぐも人ひと並ならののままどどりりせせねねババ角かく立たてておおととは
くくとと思おもふふ町内ちうないささとと出でけけり

○

静しずけけき 御代ごよの春はるの色いろももど肌はだ定さだたた衣え更さら更さらの月つきの
名なふふ重衣じゆういの裾吹風すそふくは若草わかしらハ野の伏ふみみぐぐササ朋ともををああてて教しに
違ちがひひ民たみの多おほや別わかく豊とよふ霞かすみ引ひ田い南なんふ辺へさ里さとははと
そそのの一ひと町まちの鎮守ちんしゆととて幾いく年ねん經への御社ごしゃハ利生りせいも正ただしし正ただ
一位いちゐ豊年とよねん稻荷いなり大明神だいめいじん今いま年ねんハ神かみ殿でん玉たま垣かきをを再また建た
出で来き一ひと初はつ年ねんの縁火えんかの祭まつり紀きと氏子うぢこ中なかつ寄よああつつままりりたたる
中なかつ（招まねううれて事こと弥次郎やじらう森もり多おほ八やち其その外ほかととろろの牡年うしねんハ
かかままくく種々しゆしゆの思おもひ付つきけけ度どで事こと事ことハ世よ経へ好このの万屋まんや
出で来き花はな「ササアア弥次郎やじらう隠居いんきよと森もり多おほ八やち先せん生せいももかか出でと

さきくられ
た振とくまぢやア隈居さんと森多八さん小題と出して
笑ふ「イヤく私」やア地口へ不泊とびごうおやせん
殊小歌郷落でも何でも頭を出まのハワツクハワツカ
「さ」やア地口と云人ふるやせう判者ふあるのハ及たぬ
「さ」一さう「各々ふ引」思案ぢやア困る子何でも宜う
「ア」ナラぬて呉る成ナ「え」でもなぬて、あるのさ湯豆
腐でもうらんで畑をつけまう「モウ」吾方へ来とまらまの
「さ」地のきね男とせ「ナ」二かある達ハまご吾方もあるが
弥次弟さんや森多八さんとか呼ぶややとか森の森と
くさ「ヲ」ホニ出来森さんか森ハまご知れぬ振とび
か先刻弥次さん所くろ御酒をさす「ヨ」森多八さん
此兩人で「ヲ」やくた振くまハあ難く存まるとまぢやア
「ア」所泊と上る支度とさうく「お」森達ハ些先実不
あつて地口と考へて呉る成「サ」サドめな地口があるのう
「く」て尻を切りハ森ちひ「ナ」サドめであられるのう「ヤ」
トキニ何ふさう「宜」う「ナ」ト云るが「座」中の人ふ向ひ

「サチ」^{みる}人^{あつど}が地^ちを^{あん}止^{とど}て方^{ほう}燈^{とう}の^い一^{いち}条^{じょう}を^くツてお呉^くる成^{なり}
 ト^おり^おま^おく^お多^ひく^{とく}の^{おも}人^{ひと}々^々が思^{おも}ひ付^つく^ふ雑^{ざつ}然^{ぜん}の^あ種^{しゅ}々^々
 さあぐの^{かめ}青^{あお}顔^{がほ}を^きま^きば^き遂^{つい}一^{いち}中^{ちゆう}を^くお分^{ぶん}が^く大^{だい}勢^{せい}
 の^と云^い禁^{きん}と^をよ^をそ^をワ^わけ^けて^てあ^ある^る」

「^さ次^じう^うさん^{さん}が^ち地^ぢに^にの^い名^な者^{もの}あ^ある^る東^{とう}海^{かい}道^{どう}と^き本^{ほん}町^{まち}乃^{なり}
 の^ま宿^{しゆく}の^ち名^なと^ぢ地^ぢに^にあ^ある^る」^{さう}何^{なん}様^{やう}ぞ^ぞら^らふ^ふ」^い今^{いま}も^も宜^{よろ}し^し
 ら^とふ^とが^さ免^{めん}て^てもの^{もの}の^の小^{せう}道^{どう}中^{ちゆう}の^ち名^な物^{もの}で^ぢ地^ぢに^にと^いま^まさ^さ何^{なん}様^{やう}
 ぞ^とう^とふ^ふ」^さ宿^{しゆく}の^ち名^なと^ぢ名^なお^お名^な所^{しよ}で^てあ^あつ^つけ^ける^るが^い宜^{よろ}し^しで



ある程も方が宜ら子「これの妙どぬの上の徳栗毛

とふのど面白く「サハ流人公由栗か子先地

野が東海道中栗毛の初午名所因縁付獨案内ス

「ヨ地はの頭えに上へうまのめどどいふまを「サアく早

發云とら成り「出川でも川橋でも煩ふうまわど

うるのう子「た振サく千住でも板橋でも縁でさ人あ

もバ宜い子「ア〜〜縁と大遠ひどサアく縁のふもあ

やううとを「おととと人へ除り出来ぬもど「お惚り

仕は成ナ名人の一とを聞て因はさるどらう「ヘン序

用がコりんと後が出来るせ何年可ありものをねむ

セ「サア一ツ二ツ出来まう〜〜些さ〜〜出がまう〜いが発

えい「ア〜〜「イヤア大分お早く出来まう〜と子ねむ

ハさん何年縁をねねひやまを「栗知く〜「ア

とふと出ふ地に「東西〜「エ〜〜「ま〜〜「コレサく

地にが出来ら〜まるハナ「お川が橋好で織も宜「女が

及ねとて唇画とかくのうま「ま〜〜「ま〜〜「何のめ

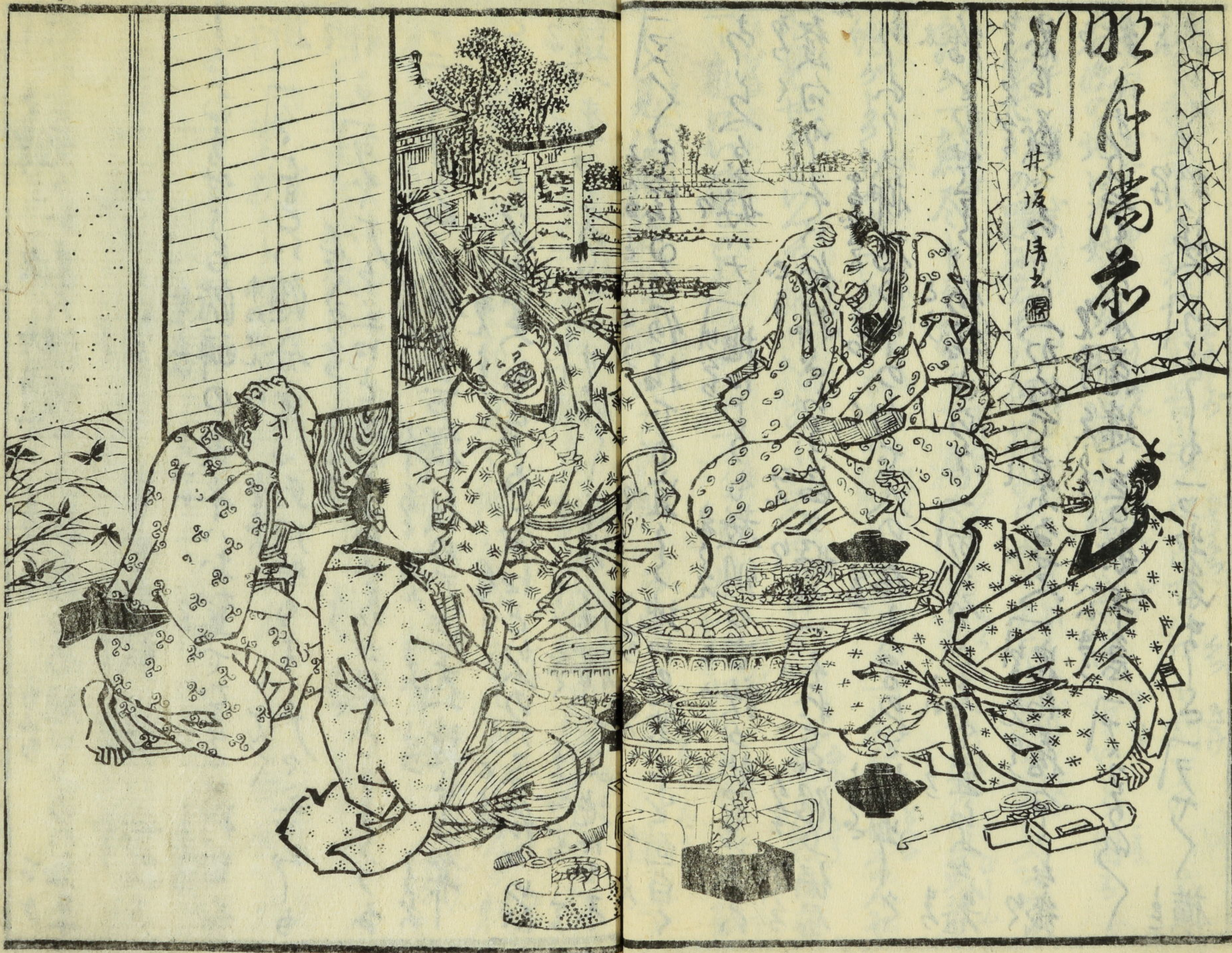
きざ 糸障のゑが牙一とくふの字の品が終出来と所が地は
のまぐとでどおまた「ドレ」け身も出来とて。エヘン枕敷
やどがや 帳程ヶ谷。へ何様と 双踏の名が後でいけとくいのウ
「どく」笑は成自分か出来も為ね癖ふ「イエ」随
分程ヶ谷も宜とておまた。サアく、気人様は遠くある
おまを成す 川崎の夜の雨 神奈川漁船五艘
甲空 上々たでどおまた「戸」塚若田とておれてお
と「三」徳又と振を顔と「沼」津不食来「吉」原とて
云とめサアく大分若一のふ出来て来とて「マ」アく何でも
数多く出来るが終ハナ弘次郎さんとおまハさんが点着で
一直まれば一ののも直成と「然」サく其家で脱面は
ふやとせく「蒲」原さあ（信心の行者「ア」ハく金毘羅
さあむぐういナ「岡」部八目「島」田止まへと味線まう
掛川ようこ娘「鳴」海千鳥「石」茶師「て」来とて
「石」部判「茶」津も鯛「何」が地はの振でるのウ「大」判
津ふお世話お茶でも上れ「京」の地はの伏見お出来ね人綱が

淀で舌がまろくねへる苦どア守にではにも利まい「イヤその
宿次の地はハ妙ど肝心の方燈（かきもの）ゆいゝ困る子
何ぞ外の題ふあてハ何指さらふ」忠臣蔵が軍人ぢやア
ある「魚尽ーが様セ」鳥尽ーが宜らふ「イヤく武者
繪がよろらふセ」女子ども小解らるゑナ「あんのかうんぞ
小見せるといつて地はとあらるあり」三「何も然女を
下座にいづもこのつど」ナニく女ハ地にとりても不解
る見ハ痛ねハナ只人ぞめきにそらく歩行半どア
司くそ指のハ何指でも宜く地はの葉トと面白く
あらるが好ナ「地はよりも教訓の古歌ク然もなすハ
發句中そハ何指さる品が好セ」それでハ腕の偏屋
らゝゝ柳橋の中の句で人の病ふるのを撰出く
繪とかせてハ何指さる「ある不とまも宜らふが先
忠臣蔵であらから来る其「忠臣蔵なるゝ幾
数もありやまとの本義達之。勘平急「ア、こりゝ
まじやア好秘」つゝも一ツおままり」ヲヤく横

司くそ指ひ何指でも宜く地にの葉トと面白く
 ありふ好ハナ「地はよりも教訓の古歌う然もなりふ
 發句やそい何指ざらう品が好セ」それで六配り偏屋
 ろいゝ柳指の中の句で人の病ふるのを撰出く
 繪とかせてゐ何指ざらう「あふふとまも宜らふが先
 忠臣蔵でうらからてあるせん「忠臣蔵さうぞ幾
 教もありやまと。本義達之。勘平急「ア、うらひく
 まじやア何指「うらひも一ツおまきうらひ「アヤク横

明月満ち

井坂一清



町の吉見うおふゝ温順う狂おふの地はどの出ま
るふら「イエ」ナニ宜いぞおませんが新りの何様を
ぶぶおませうの沈酔の義平はお駕でござる。判官を
揃「う」そふ随分宜子天川やもう「う」ぐも
解子「う」や「う」三はと本文ふりう方早く「う」うア
ナニく「う」子雁々「う」揃後の「う」先「達」う并
とせよと「う」が実云どアな「う」はと「う」のふ子供が
遠「来」うあさ「サ」く「う」唐の薩摩で又地は不
足るを「う」ア「う」配と巴野は不足と「う」名白がある
セ「う」サ物屋やあへて聞ハ惜の事と「う」方が
宜ぢやアあ「う」モウ「う」他言ハ止て何平地は「う」味と
仕てお呉る成数多い方燈で「う」間合「う」のまをせ
ト「う」折「う」出来蘇が勝をえお「う」う酒肴と持
出「う」除次郎は多ハと「う」あ「う」ければ「う」酒盛
やく地は「う」のは「う」の途切「う」何や「う」物なり「う」き
顔色の男「う」出て除次郎「う」向

トキニ せんせい 孫次郎様私ハ此中人（おれ）ハおぼえある

か何年一ツ迷ヒと暗くらさせたり下くだり 道みち以もつ兼かねつれば

貴丈ハ心こころ学まなぶとお教しえられ成なりそうぞおぼえあると私わたくしも

愚おろ心こころの悟さとれきを招まねふ所ところ教訓きょうくんをお教しえられ

惟ただふ所ところをわすれ成なりそうぞおぼえあると私わたくしハ心こころ学まなぶ

も悟道ごどうも覚えあるが国くに目めハのくとやうで他人ひとの事ことヤ

むうの心を悟さとりがましく教訓きょうくんりく多おほく事ことも有あり

ままだマアおれが迷まよつて所ところを成なりの何なんれをわすれ

ままだ子こ「イエ他たの心こころでもおぼえある私わたくしハ道みち以もつ病びやう氣きの

故ゆゑう危き角物かくぶつ忘れをて其その辭ことばもあつたが私わたくしハ

つて苦勞くろう不ふ成なりすうりやうくあるとて困こまりままだ

何なんれうたう好このむおぼえある「ハテ子こまハ何なんれ

たのざう子こ益えきもえあると兼かね知ちて居ゐるが私わたくしハ

ふけ成なりとる無む理り不ふ苦勞くろうが仕つかひのざ子こアうまう

世よの人の身みの上うへに忘わすれて能ようあるとありやう

お忘れも極ごくと損そんがありまうと先まづ忘わすれて若わかくといふと

主人（忠義の病）身命を忘れ孝の病（身）を忘る
忘恨を忘れ利欲を離く貪る惡心と止り忘る仕
まゝのふられてや分あゝまゝ「へ」る程去り孝の仕
為（身）をとりとれる夫何程「この」でござる身（身）を
大切（大切）しそ親孝のふありませうが親（親）をふ育（育）く
りら「身」を忘るそあまうては不孝でござるませう「
それ（身）の忘れ振（振）がつけきば大不孝好（好）まぶ孝の（孝）不
まゝと愛（愛）ふ一ツ（一）吐（吐）ーがわやとく「あまうは成（成）むり成（成）田（田）

舎（舎）下（下）いそく食（食）一の母子の者が在（在）る収（収）束（束）の申（申）す小（小）治（治）
業（業）と自分（自分）で居（居）る所（所）母親（母親）と十二（十二）支（支）ふる處（處）女（女）たり
の耐（耐）ふ母親（母親）が煩（煩）ひ付（付）く含（含）み由（由）一向（一向）ふまゝに腦（腦）のを
娘（娘）は夜（夜）不（不）寐（寐）に病（病）しと振（振）さとり少（少）しゆと忘（忘）り
あゝいそり冬（冬）し「所（所）が我（我）疾（疾）ふ母（母）が云（云）中（中）に我（我）方の食（食）を
給（給）ふの持（持）病（病）ぶ「其（其）振（振）ふふ事（事）あづるのハるの密（密）柑（柑）
の酢（酢）が少（少）しあゝとバ（バ）出（出）ふ食（食）付（付）く「何（何）所（所）そふ密（密）柑（柑）が
「買（買）て貰（貰）ふヨ今夜（今夜）は早（早）寐（寐）るが宜（宜）と母親（母親）の病（病）を



聞て早あさ早く寐ねて備つづと孝女けうにょの考かんがあるふり
時とき分ぶんがまま早はやいい蜜柑みつだんを賣う所ところもああり
ふと見み置おく烟えん小蜜柑せうみつだんが多おほくああれあの中うちあある
蜜柑みつだんもああるあとあの思おも案あんもああく夜中よなひ小籠ころうて十
丁じやうむらむらある所ところ（思おも案あん）ささももううちちとと彼か烟えんたたりり付つて
二ふたツツ取とく懷中かいちゆう入いる所ところを番人ばんにんが見み付つてままごご負おふ
もさもとと上かみ取と蜜柑みつだんを盗ぬすりり一ひと火か騰たふるると罵ののりり娘むすめが純
て泣な入いととささけけど情なさけああくく立たて烟えん主しゅの所ところ（連つて）

とまとままの煙えんの主しゅの娘むすめの様よう子こととて辟はく会かい負おくくととも次つぎと
とまとままの体ていああくく殊こと小せうを託たく所ところより夜道よみちを獻けんつつと蜜
柑かんの二ふたツツ欲よく心こころああて取とり来きる道みち理りハハああくく思おも案あん一ひとと
娘むすめ小せう理りを尋たずねねるるの儀ぎ小せう答こたへへるる思おも案あんと感かんで
ささああくく小せう芳ほうりり自みづから蜜柑みつだんの實み入い好このととりりたたづづま
親おやとと同どう道みちああるる思おも案あん其その蜜柑みつだんを母ははも食たぶぶとと程ほどな
く金かねははくく後のち々々ハハ仕合しあ合あひひ好このああつつて救きう急きふ昌しやうくくととままぶぶ
そそ時とき分ぶん小せう我われ人ひとが娘むすめ小せう向むかひひて問と尋たずねねるるハハそそ方かたの常じやうの

正直な心で蜜柑を盗んだのは母の爲の盗みで盗も考
ねの中にと心留て盗んだのとすゝま娘は涙をな
えうと落してそいつを孝行といふのも次郎といふのも
柔が付む兵衛後を忘るゝ蜜柑が有りくありした
りやてありと答へるといふやうだが是がマア親の爲
み身と忘れと孝行といふのもありやせうとむく名
人の俳諧師が或やういふ上つて時ふその殿さまの
かゝる圖を難題のそわ向を云ひく宗匠も困らせ

て案よとな作とある案てそいつよりや附合に
うー阿けたは魚屋乃盗人。といひつけられれば
宗匠も是を著るゝ取巻して

親の目ふたぬま珠と泣きぐ

と附られとバは感心あされといふやうな何れでも親
孝行などといふやうなおませんまト云はせて一座の人
達が感心されとも浮屠の者いふと宗匠入るぬらぬ
ひととて次郎も清も老いふと舌を吐いて笑ひ

が傾く酒も二洲などふりまぐ酒の玉ぬ席もあり

「イヤ」トキニ地には何様もさう面白くも繪地に出

て有官ふさげきと笑ひをされるのを家内小使て居

るものほろおせ「何れも家内小使て居る者不及

ど」それでも一年小一度の鎮火祭れどろろ休ん

家内小居るろろ外面でいふ若悪がせろろハナナハナ

ろろ又地は方燈の出来が悪いと耳をふさいで巨魁

小舞く居らア出来合の地は繪ハ古くってありろろ

然でもろのヨ辺に賣出の地は繪の多事大新し

品の宜可笑の幾程もあるぜ「ろろ然サく兼双糸

ろろの本で初編二編と出であるのろ随分面白いのが

山小あり「ろろ地はとや」ろろ家内小居るのろ

宜せ看人の笑ひをせきふりけと目大初年二日の間

小寿命が縮まらアナ「コレサ」ろろ高上障りともろ

魚尽しろろ魚尽しろろ地はと極て案トふろろ宜ハ

る「魚づくし」もろろ魚づくしも腹で古いセ「ろろ

物でも何でも勝つてふとはか宜い。イヤ精進の
と相違ふ銭かかるヨ其癖小魚類やといふ美味
秘へ「ナニくは身あんもハ精進相のさうが
喰ふ後の心持が宜うだ。然様サ何でも
喰ふのと「コレサくそ様ふ益あつてゐるを
云て居て行ふにせまぢやア初午祭も出来
あつて「出来ぬ戲言鱸海鼠は何様と「け
も分解あつて「五畿内五ヶ國山城大和と
地は「ナナこれナ分解で地はの判者ふあつて
あつて「ナニ又そ様ふ地は小宗匠か点をさるもの
ク外聞の悪い「サアく「お互に競争して不満さ
早く相済を極るが宜うせ「け身ハ地はと出さ
と直ふ家内と出さく「稻荷さあものあつて
お賽後の番でも仕て居ら「コウく「様々ナ
と云ふが「ナお賽後の番は付くので油揚げお神
酒でせうめ様と思つて「忌地のまこと男ご「



おごん 自分きのふりひつくくて後うしろいひと云いふさんナとある
でるあるまひあふ油揚あふあんとふ目めをうけるものから
成程なるほど不あふ費ふの油揚あふよりひきう蛤肉ひきのぬとあるら
神酒しんしゅ健利けんりで鯛たいを仕してふ勿な体たいあひせ耳みみイい誰だれがそ
招まねあふとまふものら「コレさくそんを招まねるの止とふと
マ誰誰だれそ地ぢにと搔かてふれば能うノウどうとく
酒さけをとめさ風て中ちゆうハ増とある人「何なんふとても
二に百ひゃくのふ燈あんどんぶとう早くま搔かふと初はつねふチ地
に

あつ 明あむちの地ぢにと其その後うしろふと能う「誰だれサあ古いふるの虫
世せ界かい中ちゆうハ通くと好こののとありやと

生なま霊たまのお棚たなふ店みせ初はつの坊ぼくさああまとみを萩
も ちあが出る

因いん田でん十じゅう文ぶんの将帥しゆう水みづ也なり

結むす立たやたが捻りの髪かみあふバ

爺おやさんハ馬うま廉れんお女め郎らう買か母ぼ人ひとさんハ歩あゆむと

ナのと

×
「ウ小児が母あやふと」
のたッけ「サッくま」
「ドレ」
大造
戸へ
「
他の
犬と猿
猫と狐
く云てハ舞臺
隙
狐
ト互
子
「
の娘入

「あやんの面白くも後」
「十二」
「野狐」
「
ト互
子
「
の娘入

近郷道中膝栗毛

ト儒者も厭ふと近出しつゝ大人も同く立
上て田圃とあがめ居りけり
○八幡荷奈りより思ひ付く弥次郎花多八が千社
参りまづ武州松山（系猿の記）をたどめとせり
猿立の限ハ次の編ふよりくまうみ之假

安政三丙辰新年鐫藏版目錄

遊仙香春兩艸帝

十五編

一 綵亭川柳作
壽齋國貞画

田舎織糸線袂衣

五編
六編

全同
作画

政談國盡

初編
二編

一 雄齋國輝作
全

模花櫻草語

中本一冊

一 梅暮里谷峨編
雄齋國輝画

天神一代記圖會

中本一冊

一 柳下亭種員著
勇齋國芳画

容色仙代秋

三編
二編

一 筆庵英壽作
雄齋國輝画

東都書房

馬喰町貳丁目

錦耕堂藏板



